

旧制中学校校旗誕生についての試論

福岡県の事例を中心に

水崎 雄文 (福高研修学園)

はじめに

現今ではほとんどの学校に校旗が存在し、校旗の無い学校は珍しいといつてよい。しかし学校における校旗の出現はそれほど古いものではない。ちなみに福岡県では戦前に23の公立中学が設立されていたが、創立当初から校旗の制定されていた学校はわずか2校にすぎない。23校のうち11校は開校後10年以上を経過しての校旗誕生であり、修猷館のように49年後の制定例もある。

1. 校旗の源流

校旗的なものの最初は1873年(明治6)に開校した開成学校の旗であるが、きわめてシンプルで白地に「開」の字を記しただけ、校旗というより標旗といったほうが適当なものであった。現在の校旗のほとんどは校章を刺繍し、校章にはその学校の教育指針あるいは校訓的なものが込められており、学校の精神が示されている。その精神性は旗の色にまで及んでいる。そして校旗は対外的示威性を持つとともに校内的には学校団結の象徴として大きな権威をもって生徒たちの前の出現する。

このような精神性を込めた最初の本格的校旗の出現は1889年(明治22)制定の第一高等学校(当時は第一高等中学校)の護国旗である。この護国旗は第一高等中学の徽章から「一中」の字をはずして「國」の字に置き換えている。第一高等中学の生徒は単に学問に励むだけでなく、将来も国家最高の教育を受け、国家中枢の地位に立つべき人物であることから、国家精神涵養の必要性を意識して「國」の字をいれたという。当時の久原校長は「護国旗は忠君愛国の旗であって普通一般に見られる旗印とは違い、軍旗と何ら異なるところが無い」と述べ、護国旗を軍旗と同列視している。校旗は軍旗に倣って三辺に房飾りをつけ、竿頭は金具で装飾されていた。

福岡県でいちばん古い校旗は1895年(明治28)の中学明善校であるが、校旗には房飾りが無く軍旗の形式をとっていない。島根県松江中学(当時は第一中学)では1897年(明治30)に最初の校旗が作られた。図柄、形式は不明だが、運動会の優勝旗を兼ねていたことが伝えられて

おり、本格的校旗とはいいがたい。東京府立一中(現日比谷高校)で校旗が制定されるのは1921年(大正10)のことである。わずかな例であるが福岡県に限らず、明治・大正時代の中学にはほとんど校旗が無かったといつてよい。

2. 標旗から校旗へ

一部の中学校に本格的校旗が出現するのは日露戦争(1904~05)を前後とする時期である。

この時期は校章を金糸・銀糸で刺繍し、軍旗同様に旗の三辺に房飾り、竿は黒漆塗り、竿頭は金具で装飾といった荘重感ある校旗が出現する。1901年(明治34)の奈良県畷傍中学、1907年(明治40)再制定の島根県松江中学、同じく1907年の宮城県仙台第一中学などである。これらの校旗に共通するのは皇室尊崇、教育勅語の精神である。そして軍旗の形態をとっていることである。

とくに松江中学では陸軍礼式に倣った全18ヶ条の校旗規定が定められ、また当時の教諭の校旗に関する講話のなかに「寸法は他の学校と同じく榮譽ある帝国の軍に範っております。只校旗でありますから竿の長さは斟酌してあります」とあり、当時各地の中学が軍旗に倣って校旗を作成していたことを述べている。

もうひとつ軍旗に倣った例として1899年(明治32)の慶応義塾生徒隊旗があげられる。生徒隊旗の名称をとっているが、創立者福沢諭吉から授与されたもので校旗と同列に考えてよい。この旗は特別許可を得て軍旗調進店から購入し作成されたもので、図柄は軍旗と同じ旭日であり、そこに福沢による「慶応義塾生徒隊」の7文字が揮毫されていた。松江中学校旗資料とともに校旗と軍旗との関連を示す資料である。

3. 天皇親閲の校旗

① 軍事教育の進展

1925年(大正14)陸軍現役将校学校配属令が出され、軍隊と学校の急接近が始まると、各中学での校旗制定が加速してくる。福岡県で25年までに校旗を制定していた中学は5校のみだったが、26年から10年を経過した1936年(昭和11)をもって全23中学に校旗がそろった

のである。創立から 49 年を経過した修猷館の校旗誕生は 1934 年のことであった。これらの校旗は式典のほか軍旗にならって教練査閲、分列行進、対外的団体行動の際に先頭にかかげられた。

軍隊と中学との接近は日清戦争(1894~95)の頃からみられるが、1923 年(大正 12)から修猷館と福岡中学は 4・5 年生の希望生徒を軍隊に体験入営させ、翌年から他の中学もこれに倣っている。そして 32 年(昭和 7)からは 5 年生全員、翌 33 年には 4 年生全員にも兵営宿泊訓練が課されるようになった。31 年の満州事変以来、日ごとに高まる軍国主義の風潮の中、33 年から 35 年の間に小倉中学、修猷館、福岡中学といったそれまで校旗の無かった伝統校にも校旗が横並び的に出現したのである。

陸続と校旗が誕生するなか、1933 年(昭和 8)陸軍省はそれまで中学でも用いられていた軍旗迎送におけるラップ吹奏曲「足曳の譜」の使用を禁止し、新しく「校旗団旗ニ対スル敬礼楽譜」を作成し、各中学にこれの使用を通達している。軍旗にすりよった形で校旗を制定した中学は取り扱ひも陸軍にならっており、軍は天皇親授の軍旗と中学校旗を峻別するためこのような措置を取ったと考えられる。

② 青少年学徒二賜ハリタル勅語

学校の校旗はそれぞれ独自の由緒を持つが、異なった由緒の校旗に統一的性格を与えたのが 1939 年(昭和 14)5 月の「青少年学徒二賜ハリタル勅語」である。1937 年盧溝橋事件による日中戦争の本格化、38 年には国家総動員法が制定され、この総動員体制に学生・生徒を組み入れることを企図し、陸軍現役将校学校配属令発布 15 年記念にあわせてこの勅語を発布したのであった。発布当日は全国から校旗を掲げた中学校以上 1800 余校の学生・生徒 3 万 2000 人が宮城前に集結し、天皇親閲を受けている。

親閲の前日予行演習が行われ、終了後各学校長は残り、親閲拝受章の授与式が行われた。その際石黒文部次官は訓示の中で「爾今此ノ御親閲拝受章ニ輝ク校旗ヲ仰イデ、宏大深遠ナル聖恩ヲ感戴シ奉リ、挙校一体全学一致、大イニ校紀ノ振肅ト学風ノ発揚ニ勉メ、特ニ学校教練ニ一段ノ振作ヲ期セラレムコトヲ切望シテ已マザル次第」と述べている。この訓示は文部当局が陸海軍と合同して全ての中学校旗を軍旗に準ずるものとして位置づけたことを意味する。

授与された親閲拝受章は校旗につけられ、翌日の合同査閲で天皇親閲を受けたのであった。ここに天皇親授の軍旗、親閲の校旗という構図

ができあがったのである。勅語下賜から一ヶ月後、県は各中学に勅語に対する実践的具体案の答申を求めているが、宗像中学は 7 ヶ条の答申の中に校旗をあげ、「校旗ヲ以テ学校精神校風ノ表徴トシテ奉戴」と記している。天皇親閲の校旗は絶対的なものとして神聖化されたのである。この勅語下賜の 1939 年をもって全国すべての中学に校旗がそろったのであった。

③ 女学校の校旗

福岡県の高等女学校では 1930 年(昭和 5)に門司・京都(みやこ)の両校に校旗が誕生する。県内でもっとも古い久留米(戦後明善校と合併)・福岡(現福岡中央高)の両高女は 1938 年(昭和 13)に誕生をみる。それぞれ開校後 41 年と 40 年のことだが、中学校校旗が出そろった時期とほぼ同じである。

しかし女学校の校旗誕生に拍車をかけたのは、青少年学徒への勅語下賜から 3 ヶ月後の 39 年 8 月に文部省が各県に行った校旗由緒照会である。画用紙に実物通りの色彩で校旗を模写し、500 字詰原稿用紙 1 枚以内に校旗由緒を記して提出するよう求めている。

翌 40 年朝倉高女は創立 30 年にあわせて校旗を制定し、42 年には私立福岡女学校(現福岡女学院)が開校 57 年後にして校旗を誕生させている。これらの校旗も対外的団体行動、特に頻繁となった軍関係の行事の際は先頭に掲げられ、生徒の士気を示すようになった。このような軍国主義の潮流の中で女学校にも校旗が出現するようになったのである。

おわりに

以上のような経過をたどって戦時中全ての中学に校旗が制定され、校旗は御真影・教育勅語につぐ 3 本目の精神的支柱として、学校には必ずあるべき物として本体化された。生徒は御真影・教育勅語への最敬礼に加え、校旗への敬礼も身体化させられることになったのである。

戦後御真影と教育勅語は処分されたが、校旗は特別の措置を取ることなく、天皇親閲の部分を忘却させることによって生き残ったのである。戦後の学制改革で中学を表示する校章や校旗が改められたため、一部の学校を除き天皇親閲の校旗は姿を消し、天皇親閲のことも過去の出来事としてほとんど忘れ去られていった。

しかし校旗を必須のものとする思想は学校内からでなく、大正から昭和にかけての学校教練、軍関係行事など外的要因によって生み出されたものであり、戦前の中学校校旗は軍国主義の潮流の中で誕生したといえるのである。